



▲写真1:スダジイ



▲写真2:アラカシと発根したコナラ

理学部附属 植物園のいきものたち

第19回

ありきたりなようですが、実りの秋にちなんで種子(たね)、のお話です。植物園は人為的に植えられた植物によって形づくられていますが、それらも園内で繁殖しています。つまり、花を咲かせ実をつけているのです。その中から今回は「どんぐり」とその木についてさわりを少し。

どんぐりとは: 広義にはブナ科の堅果、狭義にはブナ科コナラ属の堅果を指します。ブナ科はブナ属、コナラ属、クリ属、マテバシイ属、シイ属の5つのグループからなります。果実が堅くて大きく、とても身近な樹木たちですから「どんぐり」を知らない方はいないでしょう。コナラ属の堅果はとくに渋みが強く、食糧としての価値があまり高くないことが特徴です。これがどんぐり(団栗、クリではない、その他という意味合い)という呼び方の由来だと考えられます。広義では、渋みがなく甘みの強いクリ、シイ、ブナなども含まれますが、果実の外見は非常に似ているので、ひとつの定義といえるでしょう。

身近にあるどんぐり: どんぐりという植物は存在しません。コナラ属だけでも15種ほど日本の自生種があります。本数も種数も非常に多く身近な存在です。近畿ではアラカシやウバメガシ、シラカシが垣根や庭木に用いられています。カブトムシやクワガタムシと関係の深いクヌギのどんぐりはとりわけ大きく、象徴といえるかもしれません。

園内のコナラ属にはコナラ、クヌギ、アベマキなど落葉性のナラ類、アラカシ、イチイガシなど常緑性のカシ類があります。そしてシイ属のスダジイやマテバシイ属のマテバシイやシリブカガシもあります。いくつかは20mほどの大木になっています。

食べてみよう: 身近にたくさんあって果実の生産量も非常に多いので、知ってさえいれば、いくらでも手に入れ食べて楽しむことができます。京都市近辺だとシイ属のツブラジイという種(しゅ)を拾い集めることができます。

どんぐりの発根: どんぐりの多くは、秋口から根を出しはじめます。コナラは発根がとくに早く、どんぐりとしての貯蔵が困難なことで知られます。そのため、コナラは採取後すぐに粉にひいたとも言われています。

(撮影および解説: 今村彰生(総合地球環境学研究所))